



TITLE:

クシャーン朝の西北インド支配と 仏教(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

内記, 理

CITATION:

内記, 理. クシャーン朝の西北インド支配と仏教. 京都大学, 2015, 博士
(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18714>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	内記 理
論文題目	クシャーン朝の西北インド支配と仏教		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論の目的は、クシャーン朝が支配した時代の、西北インドにおける仏教文化の展開過程を解明することである。本論は2部から構成される。第Ⅰ部では西北インドの仏教寺院を飾った彫刻、なかでも石彫の図像・技法・碑銘の分析を通して、その展開過程を検討し、3世紀前半に大きな変革があった事実を明らかにした。そして、第Ⅱ部では、建物の石積方法と王宮の遺跡から出土した土器を分析し、第Ⅰ部で明らかになった変革の歴史的な背景を探究した。</p> <p>第Ⅰ部第1章では、ウッディヤーナ地方とガンダーラ地方における彫刻の様式を検討した。まず、ウッディヤーナ地方のブトカラ第1遺跡、サイドゥ・シャリフ第1遺跡、ビール・コート・グワンダイ遺跡の発掘調査の成果から、彫刻の年代に関わる情報を抽出した。すなわち、ブトカラ第1遺跡から出土した彫刻は、ぎごちない表現が目立つ素描派、現実味をもつ写実派、型にはまった表現が目立つ定型派の3群にわかれる。これら3群は年代的な前後関係にある。素描派は紀元後1世紀前半頃に現れる。ブッダを人間の姿で描くようになった当初のものである。サイドゥ・シャリフ第1遺跡の主ストウパの鼓胴部を飾った画像帯群も、素描派に含まれる。この画像帯群は既知最古の仏伝図である。写実派が登場した年代はわからないが、定型派の彫刻は、ビール・コート・グワンダイ遺跡において3世紀の土層から出土している。</p> <p>ウッディヤーナ地方における彫刻の年代観をふまえて、ガンダーラ地方のバーラ・ヒサール遺跡とシャイハーン・デリー遺跡の発掘調査成果を検討し、彫刻の制作年代を追究した。ガンダーラ地方では、写実派と定型派に対応する彫刻群が確認できる。その出土状況から写実派が古く、定型派が新しいことわかる。写実派から定型派への変遷は、クシャーン朝第6代王であるヴァースデヴァー1世が西北インドを支配した紀元後3世紀前半頃と考えられる。なお、ガンダーラ地方における素描派の存否に関しては、ガンダーラ地方のスカーラー・デリー遺跡から、ウッディヤーナ地方の素描派と同じ特徴をもつハーリティー立像が出土している。また、タキシラ地方から出土した彫刻のうち、J. マーシャルが「プロト・ガンダーラ美術」と呼んだ彫刻群は、やはりウッディヤーナ地方の素描派と同じ特徴をもつ。タキシラ地方の片岩彫刻が、ガンダーラ地方から輸入されたものだとするマーシャルの見解に従うならば、ガンダーラ地方にも素描派に相当する彫刻群が存在したことになる。</p> <p>以上、ウッディヤーナ地方とガンダーラ地方には、よく似た特徴をもつ彫刻群が存在した。とくに両地方の彫刻の様式が、同じ変遷をたどった点は重要である。両地方で写実派から定型派へ変遷した時期は紀元後3世紀頃と推測できる。</p> <p>第Ⅰ部第2章では画像帯を分析した。タレリ遺跡とメハサンダ遺跡から出土した画像帯を形態や技法で群別し、各画像帯群が、ストウパ鼓胴部の第1段を飾ったと想定した。それを踏まえ、各寺院と各地区の建設時期の違いを参考に、画像帯に表現された図像における時代毎の特徴を整理した。その結果、画像帯における変遷が二つ確認できた。一つは画像帯の画面区分に用いた仕切りの変遷で、古くは主に円柱や人物で画面を区分したのに対し、新しい時期にはおもに角柱で仕切るようになった。もう一点は場面の変遷で、タレリ寺院が創建された紀元後2世紀後半までは、成道から涅槃に至る場面を欠くのに対し、メハサンダ寺院が創建された3世紀前半頃には、成道以後の場面を多数表現するようになる。また、時代にかかわらず、ガンダーラ地方の寺院が涅槃場면을好んでいたことも明らかになった。塔院だけでなく僧房でも涅槃場面が出土することから、在俗信者だけでなく、僧も涅槃場면을好んだと推定できる。</p>			

第Ⅰ部第3章では、彫像における腕の接合方法を分析した。別作りの腕を接合した彫像の出土地は、ほぼガンダーラ地方に限定され、金属軸を用いて接合する方法、腕の出ほぞを身体の出ほぞ穴に差し込む方法、接合部側面を2本のかすがいで留める方法、蟻ほぞを蟻穴に滑り込ませて接合する方法の4種類がある。各接合方法には時期差があり、紀元後3世紀前半頃までは金属軸やほぞで接合する方法が主流で、以降にかすがいと接着剤で接合するものや、蟻継ぎで接合するものが現れた。以上に述べた腕の接合技法における変化は、彫像の衣文表現や頭髮表現、台座正面の文様などの変化と相関しており、彫刻の年代を考える分析項目として有効であることがわかる。

第Ⅰ部第4章では、紀年銘のある彫刻の実年代を検討した。すなわち、第1章で示した衣文表現の時期差と対照し、彫刻の制作年代を検討した。その結果、パーラートゥ・デリー遺跡出土のブッダ立像(「284年」銘)、ママーネ・デリー遺跡出土の「帝釈窟説法」彫刻(「89年」銘)、ローリヤン・タンガイ遺跡出土のブッダ立像(「318年」銘)は、この順番で紀元後3世紀前半以降に制作されたものと判明した。さらに、紀年銘をもつ彫刻以外の資料を検討すると、西北インドで用いられた主要な暦法が、インド・サカ王国の王、アゼス1世が創始した暦法、アゼス紀元であったことが判明した。近年の研究によれば、アゼス紀元の元年は、西暦紀元前47/6年である。これを用いて彫刻の紀年銘を計算すると、パーラートゥ・デリー遺跡出土のブッダ立像は紀元後237/8年に、ママーネ・デリー遺跡出土の「帝釈窟説法」彫刻は紀元後242/3年に、ローリヤン・タンガイ遺跡出土のブッダ立像は紀元後271/2年に制作されたことになる。

もう1点の紀年銘彫刻であるスカーラー・デリー遺跡出土のハーリティー立像については、第1章の衣文表現から分析することが難しい。ガンダーラ地方に存在したと断言しにくい素描派様式の彫刻であるためである。また、紀年銘の読解も定まっていない。判断しにくいのが、紀年銘を「179年」と読み、アゼル紀元で計算して紀元後132/3年に制作されたと考えるのが、現段階では最も妥当である。

以上、第Ⅰ部では、彫刻を分析し、彫刻の各要素の変遷を検討した。その結果、ヴァースデーヴァ1世の治世にあたる紀元後3世紀前半頃に、彫刻のさまざまな要素で変化が生じたことが明らかになった。人物の衣文表現、画像帯の仕切りや場面の選択、彫像の接合技法・頭髮表現・台座の文様など、多様な要素がこの時期に変化した。西北インドの彫刻史における一つの大きな画期は、紀元後3世紀前半頃にあった。第Ⅱ部においては、この画期の歴史的背景を検討した。

第Ⅱ部第5章では、ガンダーラ地方の建物構築に用いられた石積方法を分析した。従来、タキシラ地方では石積方法に時期差があるとわかっていたが、その他の地方ではその差は認識されていなかった。しかし、近年の発掘調査で、ガンダーラ地方のいくつかの遺跡でも、石積方法に時期変遷があることが判明した。本稿では、石積方法の時期変遷が、ガンダーラ地方全体で認められるかどうかを確認し、その変遷がいつ、どのようにおこったのかを検討した。すなわち、各遺跡の石積を分析した結果、ガンダーラ地方全体で、紀元後1世紀後半頃までは野石積を用いたこと、2世紀初頭頃に地文様積が、3世紀前半頃に半切石積が現れたことが判明した。なお、ラガニト遺跡では例外的に4世紀以降のある時期から、切石積が用いられた。なお、ガンダーラ地方の石積編年を、タキシラ地方やウッディヤーナ地方の石積編年と比較すると、各方法が登場する順序は同じだが、登場時期には差があるようだ。

第Ⅱ部第6章では、ガンダーラ地方のチャナカ・デリー遺跡を検討した。とくに、下層の王宮は紀元後1世紀後半に建立され、紀元後200年前後に大地震で破壊。修復されることなく廃棄されたことが、遺構の検出状況や出土土器の分析から判明した。王宮が建立されたのは、西北インドをインド・パルティア王国が支配した時期、もしくはクシャーナ朝の最初期である。ただし、王宮建立を命じたのは、西北インド全体の支配者ではなく、この地域を任された有力者であった可能性もある。王宮廃棄の原

因となった大地震は、クシャーン朝の西北インド支配にとって大きな痛手となった。

以上の分析で、西北インド仏教文化の展開過程について、以下の3点が明らかになった。第1点目は、西北インドの彫刻や建物において、地方を越えた共通性と地方ごとの独自性があることだ。彫刻に関しては、地方間で図像の様式は共通するが、腕の接合方法などの技法は異なる。石積方法については、異なる方法の出現順序は同じでも、出現時期にはばらつきがある。

第2点目は、西北インドが仏教文化の展開において重要な役割を果たしたことである。西北インドにおいて、ブッダを人間の姿で表現するようになったことは既に知られているが、本論文では、その後も西北インドで大きな変革があったことを示した。すなわち、画像帯で現わす場面の変化である。古くは成道後の場面がほとんどないのに対して、新しい時期になると成道後の場面を集中的に表現するようになる。仏教信者の好みが変わった結果、画像帯の場面にこのような変化が生じたと考えられる。

西北インドにおける画像帯の分析は、その後の仏教文化の展開を検討する上でも重要な意味がある。紀元後2世紀後半頃に創建されたタレリ寺院は、涅槃場面を好んだのに対し、3世紀前半頃に創建されたメハサンダ寺院は、燃燈仏授記や施土供養の場面を好んだ。涅槃図の愛好は中央アジアの仏教文化に連なり、燃燈仏授記と施土供養を一对で表現することは、後のインドや中国北魏に受け継がれた。なお、西北インドで過去仏を描くようになるのは紀元後3世紀以降と考えられてきたが、タレリ寺院の画像帯に過去仏を描いたものがあるので、その登場は2世紀後半頃までさかのぼる。

第3点目は、紀元後200年前後に発生した大地震が、西北インドの仏教文化の展開において大きな影響を及ぼした事実である。ガンダーラ地方で制作された彫刻の様式や技法は、ヴァースデーヴァ1世の治世、つまり紀元後3世紀前半頃に大きく変化する。人物の衣文は二重平行線や翻波式など型にはまった表現になり、彫像の腕の接合方法も変化した。ストゥッコ彫刻が本格的に制作されるようになるのも、この頃だったと考えられる。その変化は彫刻だけでなく、建物の石積方法にも現れる。こうした変化は、紀元後200年前後の大地震発生時に、クシャーン朝は依然として政治権力や経済力を維持しており、震災復興に際して、新様式、新技法を導入して寺院の修復や彫像の制作をおこなったと考えられる。漠然と3世紀頃と考えられていたストゥッコ彫刻の出現も、短期間に安価に多数の彫刻を作り出す必要があった災害後の復興事業の一環と考えれば説明しやすい。

紀元後226年、西方のイラン高原でササン朝が勃興すると、クシャーン朝は圧迫され、ついには北方の支配領域を手放す。ササン朝の支配下に入った後も、西北インドでは仏教活動は続いていた。つまり、紀元後3世紀前半頃の彫刻や建物に見られる様式や技法の変革は、支配者の交替とは関係なく、クシャーン朝治下でおこった現象であった。

(論文審査の結果の要旨)

クシャーン朝すなわち紀元1～3世紀の西北インドは、仏像誕生の地、仏教文化発展の地として、仏教史・美術史・考古学などの関心を集めてきた。ガンダーラ美術は、それを象徴する概念である。しかし、石彫やストゥッコなどの仏像彫刻に関しては、美術様式論的な研究や、仏伝やジャータカにもとづく群像場面の解釈について研究が積み重ねられてきたが、発掘調査を踏まえた研究や分析成果はやや稀薄であった。

論者は、西北インドのウッディヤーナ地方およびガンダーラ地方で出土した石彫の美術様式論的な検討成果に関して、考古資料によって年代的な根拠を補い、クシャーン朝第6代のヴァースデーヴァ1世が西北インドを支配した3世紀前半に、写実派から定型派への変化が起こったことを示した(第Ⅰ部第1章)。さらに、水野清一が率いた京大隊が調査したタレリ遺跡・メハサンダ遺跡におけるストゥーパ鼓胴部第1段を装飾した画像帯を復原・分析し、石彫による群像の時代変遷を明らかにした。すなわち、場面を区分する仕切りが、古期は円柱や人物であるのに、新期には角柱が主体となる事実、また、古期には成道以後、涅槃以前の場面が欠落するのに対して、新期には成道以後の場面を多用するようになった事実を示し、新期の実年代が3世紀前半にあること明らかにした(第Ⅰ部第2章)。また、第Ⅰ部第3章では、ガンダーラ地方における大型石彫(尊像)の腕部と身部の接合方法を、金属製雇ほぞ結合、ほぞ結合、かすがい結合、蟻ほぞ結合に分類し、前2者主体が後2者主体へと移行した時期が3世紀前半以降にあることを示した。

以上の石彫の年代観を根拠に、これまで百家争鳴状態にあった紀年銘のある石彫、すなわちパーラートゥ・デリー遺跡出土のブッダ立像(「284年」銘)、ママーネ・デリー遺跡出土の「帝釈窟説法」彫刻(「89年」銘)、ローリヤン・タンガイ遺跡出土のブッダ立像(「318年」銘)は、この順番で、いずれも紀元後3世紀前半以降に制作されたものであるとした。さらに、紀年銘をもつ彫刻以外の資料を検討し、西北インドで用いられた主要な暦法が、インド・サカ王国の王、アゼス1世が創始した暦法、アゼス紀元であることから、紀元前47-6年を元年として、パーラートゥ・デリー遺跡出土のブッダ立像を紀元後237-8年、ママーネ・デリー遺跡出土の「帝釈窟説法」彫刻を紀元後242-3年、ローリヤン・タンガイ遺跡出土のブッダ立像を紀元後271-2年に制作されたと考えた(第Ⅰ部第4章)。美術様式論や考古資料にもとづいて提起された銘文に関わる積極的な発言として評価できる。

第Ⅰ部で論証した紀元後3世紀前半における大きな変革は、彫刻だけでなく建物の基礎を支える石積方法においても認められる。すなわち、野石積、地文様積、半切石積という3つの石積方法に関し、ガンダーラ地方では紀元後3世紀前半頃に半切石積が登場する。ただし、石積方法の変遷順序は西北インド各地で同じであるが、変遷時期に関しては時期的差異があるという(第Ⅱ部第5章)。

石積方法および出土土器の分析により、ガンダーラ地方のチャナカ・デリー遺跡下層で検出された王宮は、紀元後1世紀後半以前に創建され、紀元後200年前後の大地震で倒壊、廃棄されたことがわかる。この大地震がクシャーン朝第6代のヴァースデーヴァ1世が西北インドを支配した3世紀前半における彫刻の様式や技法の大きな変革をもたらした一つの原因と論者は考える。すなわち、地震後の復興事業において、新様式・新技法が考案、習熟されたと考えるわけである。論証を欠くが、短期間に安価に彫刻を量産することを目的として、石彫に加えてストゥッコ彫刻もこの頃に出現・普及したとする論者の推測には説得力がある。

以上、論者は美術様式論を踏まえつつ、ストゥーパを装飾した群像の復原、大型石彫(尊像)の身部と腕部の接合技法、石彫に見る紀年銘、建物の基礎となる石積方

法、出土土器など、各種考古資料を駆使して、クシャーン朝支配下の西北インドにおける彫刻を検討し、第6代ヴァースデーヴァ1世の時代に大きな変革があったことを明らかにした。王宮跡と思われるチャナカ・デリー下層遺構が地震倒壊したと推測できることから、地震復興にともなう新様式の成立を説く点も興味深い仮説と言える。

ただし、多様な考古資料を駆使して新たな議論を進展させたためか、それらを整合させる用語概念にやや生硬な部分が残し、全体を合わせて公刊する場合には、さらなる推敲を重ねる必要があるように思われる。また、3世紀前半の変革が本論文の主題となったため、誰もが知っているカニシカ王が登場する余地がほとんどなく、「クシャーン朝の西北インド支配」という論題は、ややそぐわない感を受ける。しかし、論者の視野は、クシャーン朝すべての時代の彫刻や考古資料だけでなく、ストゥーパを飾る群像表現の分析など、仏教東漸にともなうアジア各地の仏教文化の比較へと広がる可能性を秘めている。論者による今後の一層の研究の進展が期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年3月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。